論　文

小児病棟における学生ボランティアの活動から
―全人的人間理解の可能性

才藤　千津子
同志社女子大学
現代社会学部・社会システム学科
准教授

中村　信博
同志社女子大学
学芸学部・情報メディア学科
教授

小﨑　眞
同志社女子大学
生活科学部・人間生活学科
准教授

藤原　翔子
同志社女子大学
特別養護老人ホーム　バプテスト・ホーム
本学研究生

Abstract

The authors of this paper planned and carried out a volunteer program for college students at a children's ward in a university hospital, and subsequently analyzed students' reports of their work in order to examine what the students had learned through the program. In the reports, the students initially expressed "anxiety," "fear," and "powerlessness" in a highly technological and medical environment, in which children and their family members were in crisis. However, through everyday discussion and reflection, they subsequently found new meaning in their work as volunteers, and writing about its significance of their work in terms of "keeping their eyes on the children" and "sitting close to the children." Through their experiences in such an environment, they seemed to confront their own vulnerability and reflect upon the deeper meaning of human nature and human relationships. These findings suggest that the students transformed their feelings of powerlessness in a crisis situation into a powerful driving-force for creating a new community.

第1章　はじめに

2011年3月11日の東北大震災以来、ボランティア活動の役割の重要性が新たな注目を浴びている。近年日本の大学では、ボランティア活動の教育的効果への関心が強まり学生のボランティア活動を支援する様々な試みが広がってきた。そしてその中で、ボランティア活動を教育に取り入れる体験型教育手法、たとえば地域に貢献しつつ同時に学生の学びと成長を促進するように設計された「サービス・ラーニング」に積極的に取り組む大学もみられるようになった[1)]。

本研究は、本学でキリスト教教育に携わっている筆者たちが、本学でのボランティア活動とボランティア教育プログラムの方法と意義について試行錯誤しながら計画・実施し、その上で学生が書いた記録を分析し、学生たちが何を学んだのかを考察しようとしたものである。筆者

A Holistic Understanding of the Human Being: A Report on Student-Volunteer Activities at a Pediatric Ward

たちは、今後ボランティア活動を大学生のための教育プログラムとして開発することを目指しているが、本論文はそのための基礎的な取り組みについての報告であり、今後の研究のための出発となる試みである。

筆者らは、2009年度三菱財団社会福祉助成金を得て、九州・四国地方の小児がん医療の拠点である大学病院小児医療センターの医師や看護師、病棟保育士、院内学級の教員、他のボランティアの協力を得ながら、大学生ための集中的ボランティア活動とボランティア教育プログラムを計画し、2009年3月から2011年9月までに5回の活動を実施した。その目的は、1）学生が入院中の患児とそのご家族を支援するボランティア活動を通じて自らの学びを深めること、2）ボランティア活動を通じて、センターに入院中の患児とその家族のこころのケアの諸問題に関して患児と家族に提供できるプログラムを計画、実施することであった。

この研究活動の特色は、(1）ボランティア活動を大学での教育に取り入れる体験型教育プログラムの設計と検証を目指したものであること(2）学生が大学病院の小児病棟という極めて緊張度の高い先端医療の現場で多業種チームの一員として活動すること（3）人間関係による支援に焦点を当てた教育プログラムであること(4）活動終了後も「絵本作り」などを通して継続的に患児とその家族への支援に取り組むこと(5）学生は「振り返り」と「分かち合い」のために記録をとることを要求されることである。

このボランティア活動と教育プログラムを通して学生は何を学んだのだろうか、この活動は学生にとってどのような意義があったのだろうか。学生たちが書いたレポートや振り返りの記録から読み取れることは何だろうか。

以上の問いに答えるために、本研究では、計5回実施されたボランティア活動の参加者延べ30名（本学社会科学系学部生・大学院生・卒業生）による約288,000字におよぶ活動中の観察記録、話し合いや振返りの記録、事後レポート、実施直後のインタビューなどの記録を分析してテーマとキーコンセプトを抽出し、それらの言語表現に表われた学生の意識について考察を加え、その上でこの活動において学生たちの中で醸成された人間理解の内容と可能性について今後の研究の課題と可能性を示した。

第1章「はじめに」と第7章「おわりに－全人的人間理解に向けた学びの可能性」は才藤が、第2章「ボランティア活動とは」は小崎が、第3章「ボランティア活動の内容と実施プロセス」は才藤と藤原が、第4章「学生の記録から見える学生の『学び』の諸様相」は才藤・藤原・小崎が、第5章「評価・分析コーパスから見える現状と展望」と第6章「人間理解：聖書を手がかりに」は中村が担当した。第4章では学生の記録（レポート）というデータに質的分析を加えたが、第5章では同じデータにデータマイニングの方法によって分析を加えて前者の結果を補完した。

なおこの論文では、本研究において実施された大学病院小児病棟でのボランティア活動を指す言葉として「ボランティア活動」、「ボランティアワーク」「ボランティア教育プログラム」という言葉が使われているが、その中でも「ボランティア教育プログラム」という言葉は、事前研修・事後研修、絵本作りなど「ボランティア活動」の持つ教育的側面に注目したものである。

第2章　ボランティア活動とは

本章では日本におけるボランティア活動の歴史を素描し、現代へとつながる潮流を概観する。また、ボランティア活動の源流を確認するために聖書（キリスト教）の文化の一端に言及する。

1）日本におけるボランティア活動

日本におけるボランティア活動の歴史は、主たる内容（対象と活動）の変化に応じて以下の4つの時代に区分することができる[2)]。

a. 前近代期：伝統文化的価値基準の影響下での救済活動

ボランティア的な活動の起源を訪ねれば、古

代の宗教的慈善活動に遡る事が可能である。いわゆる古代社会において援助の対象となった孤児、孤老、困窮者、貧窮者への救済事業である。中世・近世期においては、儒教の仁の思想や武士階級の慈恵に依る活動等を指摘する事が可能であろう。五人組制度や無尽講等の制度も見逃せない。

b. 近代期：近代化の中で生成された社会的弱者への援助活動

従来からの宗教的な慈善活動に加え、人道主義的な動機からの博愛事業やセツルメント運動が積極化した。しかし、それらの活動の多くは貧弱な公的対策の代替的、補完的活動であった。大正期以降敗戦時までは、いわゆる地縁による助け合い活動が盛んとなった。民生委員の前身である方面委員制度等もボランティア活動の一側面を表している。戦後は、民主主義に根差した日本国憲法の理念の影響下、全国各地にてボランティア活動が芽生えた。1951年には、都道府県の社会福祉協議会が発足し、全国社会福祉協議会は1959年に「ボランティア活動研究会」を立ち上げた。社会福祉の文脈の中でボランティア活動が推進され、1960年代には「ボランティア」との言葉が全国的に使用されるが、その外来語の理解は未成熟であった[3)]。

c. 市民社会生成期：市民活動（社会関与を求める運動、市民ネットワーク形成）

1970年代は、オイルショック等による社会変動に伴い、ボランティア活動への期待が高揚した。「いのちの電話」が開設されたり、市民運動が広がったりしてNGOの先駆けとなった。この時期、先の社会福祉協議会もボランティアセンターを開設し、「社会性」、「当事者性」へ関心を払う「アクション型」ボランティア活動を実践した[4)]。

1977年、国庫補助の下、「学童・生徒のボランティア活動普及事業」（「ボランティア協力校」制度）が実施され、学校教育現場に「ボランティア」が取り入れられた。70年代以降80年代にかけてのボランティアの多くは、様々な人々との出会いの意義を謳うものであった。特に、学童や児童が幼小者、高齢者、障がい者等との交流を通して、福祉へ関心を抱くこと事を意図したボランティア活動が多かった。日本社会の高齢化、核家族化に伴い、福祉のニーズが増大するとともに、「共生」、「共育」、「共学」をキーワードに「ネットワーク型」ボランティア活動が積極化した[5)]。

このような流れの中、1987年までに、社会福祉協議会は全国市区町村に1699カ所のボランティアセンターを設置した。一方、学校現場でも、1982年に教員を中心に全国ボランティア学習指導者連絡協議会が結成された。このような流れは高等教育現場にも影響を与え、1987年に大阪キリスト教短期大学にて大学ボランティアセンターが開設された[6)]。

d. ポスト・モダン期：社会の対抗軸としての奉仕活動・学習活動

1995年の阪神淡路大震災以後、被災者援助を目的としたボランティアが活性化し、当該年を「ボランティア元年」と呼称するようになった。これ以降、高等教育現場でも「大学生への教育効果」、「社会・地域とのインターミディアリー（intermediary）機能」、「大学の社会貢献」の3つをその存在意義として大学ボランティアセンターの設置が急増した。確かに、突発的な外圧により、ボランティア活動への関心が高まったとも言えるが、一方、1990年代後半以降の社会状況が内発的影響を与えたともいえる。すなわち、90年代後半の日本社会にくすぶり続けていた課題（いじめ、暴力、不登校、少年犯罪）へ対抗すべく中央教育審議会は「生きる力」を掲げ、福祉教育やボランティア体験を求めたといえよう[7)]。

以上のように、日本社会におけるボランティア活動は、宗教・文化の影響の中での救済活動から、いわゆる社会的弱者への援助活動へ移行して社会福祉的活動として広がった。その後、市民運動として日本社会に影響を与えると共に、市民社会の中に多様なネットワークを創出した。昨今は日本社会の個人化の影響も受け、ボランティア活動自体が個々人の成長へと関心を強め、

「生きがい」、「自己実現」を目指した多様な活動（自然環境、教育、文化、スポーツ、医療、平和、人権、地域振興等々）へ広がった。一方、多様化の中で目的が不明瞭となり、ボランティア活動自体が質量共に伸び悩んでいるとの指摘もある。

確かに、ボランティア活動の内実が変容してきているのかもしれない。いわゆる「救済・援助」といった要素は背後に追いやられて、代わりに「生きる力」や「豊かな人間性や社会性」、「社会に貢献できる資質」等、個々の人間の陶冶に関心が払われるようになってきた。そのような中、ボランティア活動が支援の受益者だけでなく、活動者自身に対して学習効果を与えることが、昨今の研究成果により指摘されている。その成果は以下の３点に集約できる[8]。

１）活動者自身の認知発達への期待
２）専門学習への動機付けとその理解の促進
３）市民性の獲得、市民的責任、利他的意識の向上

よって、昨今のボランティア活動はある特定の対象者（受益者）への支援（福祉的支援）のみを目的としているのではない。また、「生きる力」や「豊かな人間性」や「社会貢献の資質」といった曖昧な道徳的表象に還元することを目的とした活動でもない。社会へのサービス（奉仕）を通し、自らの単なる「体験」を構造的に構築する「経験」としてのボランティア活動が再評価されている。換言すれば、学びと成長を内包したサービス・ラーニングとしてのボランティア活動が今日的状況下において期待されていると言えるだろう。

2）ボランティア活動の源流と聖書の言葉

上述のサービス・ラーニング的視座の源流は、聖書の思想に見出すことができる。そもそも、「ボランティア（Volunteer）」という言葉の語源は、「自ら意思をもって行動する、喜んで何かをする」というラテン語「*Volo*」から派生した「*voluntas*」であり、ギリシア語の「*dokias*」と同義である。両者とも「意思」、「判断」、「決心」という意味であり[9]、語源的に表現するなら、「喜んでの決断」であると言える。ここから、ボランティアとは主体的な自己成長への決定であることが窺える。

キリスト教教育学の湯木洋一はボランティアの意味と方向性を学びとることを意図して、新約聖書の言葉、「御心に適う（*eudokia*」）」に注目した。この言葉が「*dokias*」に「良い、善い」という意味の「*eus*」を加えた表現である事に着眼し、「御心に適う（*eudokia*）」とは「善き意思、善い決心、善い判断」である事を読み解いた。さらに、善き意思決定とは「他者へ仕えることへの自由」、「自由意志（自己解放）」であり、「他者の重荷を主体的に担う姿勢」であることを学び取ったのである[10]。

また、フェミニスト神学の絹川久子も「長血をわずらっている女性の物語[11]」の解釈の中でこの女性の行動に注目し、「イエスは袋小路の難局を打破しようとした彼女の意思決断に基づく自発的行為」を『神のみこころを行う』ことと認めたのではないだろうか[12]」との解釈をする。ボランティアとは自由意志、決断に基づき、他者へ「仕える事（仕事）」であり、そのことへの関与の自由を表わす。さらに、絹川は聖書のコンテクストを的確にとらえ、「仕え」の意義を分析した。彼女によれば、ギリシア語文化圏において「仕える」という語は「食卓での給仕」と「家庭内の世話、面倒」の２つを意味した。そのため「仕える」ことは「従属させられる者の犠牲によって権力を追求し続ける支配的政治構造との極端な対照において採用された言葉」であり、結果として支配者側に都合の良い犠牲の要求を正当化した。しかし聖書の文化は、このような概念を覆し、「仕える」事の新たな意義を提示した。すなわち聖書の語る「仕え」とは、「すべての人間がそのいのちの全体性において生きることができるようになるために自分のいのちを用いる」ことを示唆するのである[13]。

以上のことから、ボランティア活動とは「他者の命のための、自発的な仕事（仕える事）」であり、その業は「犠牲的・従属的な関係性を

打ち砕き、主体的関与者自身が他者のいのちと共に自らの命への覚醒を創出する」ものだと言える。

第3章　ボランティア活動の内容と実施プロセス

この章では、本研究の対象となったボランティア教育プログラムの内容と実施のプロセスについて概説する。

1）活動の背景

近年小児がん医療においては、患児と家族への心理社会的援助の重要性が社会的注目を浴びている。ここ20年程の小児医療のめざましい発達によって、今日では70～80％の小児がん患児が治癒するようになった。しかし現在でも小児がんは子どもの死因の第二位を占めており、近年小児がん医療においては、患児自身への援助のみならず、患児の家族への心理社会的援助の重要性、小児がん治癒後の小児がん経験者の晩期合併症[14]や社会適応の問題が新たな課題としてクローズアップされている。

小児がん治療の分野では、入院生活が患児とその家族に及ぼす影響の大きさを考え、医療関係者がチームで多角的な援助体制を作り、がん患児と家族に対して多職種による援助を提供する全人的ケアの有効性が強調されてきた[15]。また小児がんの闘病生活は患児のみならず患児の両親やきょうだいといった家族にも大きなストレスを与えることが報告されており、患児の家族へのサポートを提供することも急務とされている[16]。

2）活動の概要

本稿で述べるボランティア教育プログラムは、2009年3月、2010年3月、2010年9月、2011年3月、2011年9月と計5回にわたって実施されたものである。プログラムには、本学現代社会学部ライフ研究会のメンバーを中心に、学生延べ30名、医師・教員・保育士など病棟スタッフや病棟での他のボランティア活動参加者たち延べ40名が関わった[17]。

〈ボランティア活動実施の経過〉（以下の日程以外に事前学習・事後学習をそれぞれ2回ずつ実施）

第1回 2009年3月9日～12日　4日間
　参加者：5名（大学院生1名、社会システム学科2回生3名、情報メディア学科3回生1名）
第2回 2010年3月7日～13日　7日間
　参加者：6名　（大学院生1名、社会システム学科4回生1名、2回生4名）
第3回　2010年9月12日～18日　7日間
　参加者：8名（社会システム学科3回生4名、情報メディア学科2回生1名、卒業生2名）
第4回　2011年3月22日～26日　5日間（3月11日に起こった東北大震災の影響により急きょ規模を縮小し、福岡に実家がある学生1名と経験者2名のみで活動したため学生の記録はない。）
　参加者：3名（社会システム学科4回生1名、卒業生2名）
第5回　2011年8月23日～27日　5日間
　参加者：8名　（社会システム学科4回生4名、3回生・2回生・1回生各1名、卒業生1名）

3）活動の目的

この活動の目的は、事前学習、現地でのボランティア活動、現地での活動終了後も続く学習やケアの企画への支援などを通じて学生たちが自らの知識と経験を深め、加えてそれらの活動を通して小児医療センターの医療活動への支援をすることであった。そしてその際の学習のキーワードは、「記録」「体験の振り返り」「グループでの分かち合い」である。

学生の学習目標は、第一に、学生たちが病院の多職種ケアチームの一員として活動するボランティアであるという自覚と責任を持つこと、第二に、人と出会い人間関係をつなげてゆくことを体験的に学ぶこと、第三に、日々の体験の「振り返り」とグループでの「分かち合い」を通して自分と他者を見つめること、そして最後に、活動の場で起こっていることを観察、記録

し、自分にできることを主体的に実行することとされた。

4）活動の特色

次に、この活動の特色と思われることを述べたい。

a. 記録と振り返り（リフレクション）を通じて自分を見つめ援助的人間関係への洞察を深める

プログラムでは、毎日２回行われるグループでの分かち合いとやりとりの中で自分を見つめること、自分の体験の記録をつけ体験を反芻することを課題とした。このグループ・ワークの方法は、引率者である教員才藤自身が学んできた臨床牧会訓練[18]といのちの電話[19]ボランティア相談員養成訓練におけるグループ・ワークの方法を本学の学生向けにアレンジしたものである。グループワークにおいて、教員は学生の相互交流と自己理解・他者理解を促進するためのファシリテーターとしての役割をとった。毎日のグループワークの時間は、自分の行動が患児やその両親、病棟の活動、また仲間たちに対してどのような影響を与えたのかについて考える機会となった。

b. 人間関係を通じてこころのケアを提供する

このボランティア活動の目的は、人間関係作りを通じて入院患児とその家族に「こころのケア」を提供することである。そのために、プログラムの開始時、ボランティア自身が自分を拓き仲間と繋がることを学ぶために集中的人間関係ワークショップ（「つながるワークショップ」）に参加することが義務付けられるなど、常に人間関係づくりに焦点が当てられた。

c. 病院ボランティアとしての倫理と責任の自覚を持つ

事前学習の一部として、当病院ボランティア委員会が作成した小冊子『病院ボランティアの心得』を使い、病院ボランティアの特殊な問題点、たとえば、身だしなみを整え言葉遣いに気をつけること、患児とその家族のプライバシーを厳守すること、医療活動を妨げないこと、手洗い励行など衛生面に注意することなどを、具体的に学んだ。また病院という特殊な環境の中で、自分たちが医療現場でのボランティアとしてどのような役割を担おうとしているかについて考える機会をくり返し持った。

d. 音楽会や絵本作りなどのプレイルームでのプログラムを自主的に企画・実施する

病棟での活動は、幼児のための遊びの空間「プレイルーム」での患児との遊びが中心であった。並んで、「音楽会」（本学の音楽療法専攻の大学院生を中心に、患児たちと一緒に楽器を演奏したり歌ったりする）、「飛び出す絵本作り」、「写真立て作り」などの小さなワークショップを開催したが、その企画と準備、実施一切は、学生の主体性に任せられた。

e. 病棟カンファレンスに出席し、他のボランティア団体の人たちとも交流する

小児医療センターでは、月に１回、センターの病棟医・研修医・看護師・院内学級教員・病棟保育士・臨床心理士 20 － 30 名が集まってケース・カンファレンスが開催されている。ボランティア活動中には学生たちもそれに参加して、小児がん患児への全人的ケアについて現場での議論が交わされるのを傾聴した。参加の必須条件として「守秘義務」が課されており、この経験から病院における多職種ケアチームのメンバーであるという自覚を持つことが期待された。

f. 医療スタッフとの懇親会で交流する

ボランティア活動中の一夜、仕事を終えた医師・看護師・院内学級教員・病棟保育士らが加わって地元の「もつ鍋屋」で懇親会を開催した。この席は、学生たちにとって病棟ではプロの医療者として働いている社会人たちと打ち解けた話し合いをし、彼らの経験を聞くことができる貴重な機会となった。

g. 患児と家族への支援

学生たちとの振り返りの中で、小児医療センターにおける小児がん患児とその家族へのこころのケアに関する問題として「入院患児家族（特に母親）の精神的ストレスの大きさとサポート

の必要性」「病棟プレイルームの役割の大きさと、絵本や音楽などが身近にある安全な環境作りの意義深さ」というテーマが浮き上がってきた。この結果から、①プレイルームの環境整備（病棟における絵本展示プログラム、患児と家族のための音楽プログラム、）絵本や紙芝居計51冊と4つの楽器、14セットの遊具をプレイルームに寄贈②患児の家族の精神的ストレスや孤独感をサポートするための相談活動（毎月1回2時間、毎回2名の主に母親が利用）③入院時に患児が自分の病気や治療の内容、病院環境を学ぶためのプレパレーションとしての「ガイド絵本」の作成の活動を医療スタッフに提案し、彼らの全面的協力を得て作成した[20]。

第4章　記録から見える学生の「学び」の諸様相

1）調査の目的

本章では、ボランティア活動の学生の記録から抽出された7つのテーマを中心に、記録に表出された学生の意識を分析した。そこから学生は何を感じ、体験し、何を学んだと感じているのか、ボランティア活動においてどのような人間理解が育まれたのかを検討した。

2）調査の期間と場所

本稿で取り上げた活動と調査が行われたのは、九州地方の小児がん治療の拠点となる大学病院の小児医療センターである。われわれのチームがボランティアをした小児科の総ベッド数は42床、主にさまざまな小児がんを患った乳児から18歳までの子どもたちが入院している。研究の期間は、第1回2009年3月9日～12日から第5回2011年8月23日～27日まで、延べ28日間のボランティア期間に加えて、毎回の事前学習･事後学習である。研究の対象となったのは、参加した学生延べ30名、うち2名は卒業後もリーダーとして参加した。学生は現地集合・現地解散であり、現地までの交通費や食費などは各自が負担したが、現地での活動中の宿泊場所は本プロジェクトで確保した。

活動と調査が行われたのは主に病棟内のプレイルームである。プレイルームは小児病棟の中心、ナースステーションの正面にあり、前面が大きなガラス窓で外から中の様子がよく見えるようになっている。廊下を通る医師や看護師が、通りすがりにちらっと中をのぞいてゆく様子が見える。入り口で手をよく洗い靴を脱いで中に入ると、中は20畳ぐらいの広い空間で、床にはじゅうたんが敷いてあり、たくさんの絵本やビデオ、カラフルな積み木や機関車などのおもちゃ、ピアノなどが壁沿いに並んでいる。子どもが乗ってその上で跳んだりしても大丈夫なように安全に作られている大きなビニール製の椅子のようなものが部屋の中央に幾つも置かれており、子どもたちはそれに乗ったり倒したり、あるいはいくつかを組み合わせて家を作ったりして遊ぶ。プレイルームで遊ぶのは主に学齢期前の幼児であるが、ようやくハイハイができるぐらいの乳児がお母さんに抱っこされてやってくることもある。中学生のお兄さんお姉さんが遊びに来ることもある。

お母さんたちは床に座り、遊んでいる子どもたちを見守りながらお母さん同志でおしゃべりをしたり居眠りをしたりしている。ここは親同士の情報交換の場、一時的に子どもの看護から離れられる息抜きの場ともなっているのである。プレイルームを担当しているのは若い女性の病棟保育士で、学生たちも彼女の指導のもとに活動したが、彼女は常に部屋全体を見渡しながら子どもの安全に目を配っている。このようにプレイルームは、「遊びの場」であるとともに病棟での子どもの生活にとって重要な療育の場ともなっている。

プレイルームで遊んでいる子どもたちは、健康な幼児と変わりない笑顔で学生たちに近づいてくる。ただここが病院だとわかるのは、みなパジャマ姿であり、多くは腕に点滴の注射の管をつけていたり点滴台や機械のついた台を自分で引っ張っていることである。半分以上の子どもたちは治療のために髪の毛が薄く、毛糸の帽子を被っている子どももいる。明らかに同年齢

の平均より体重が少ないと思われる子どももいる。

3）データ収集の方法

学生の学びについての検討の対象とした資料は、第1回目から5回目まで（活動が縮小された4回目を除く）活動の一連のプロセスの中で提出された参加学生の「事前レポート」、活動中の「観察記録」、「事後レポート」に加えて、教員の「観察記録」である。タイプされ教員に提出されたレポートの総分量は、1200字詰めA4レポート用紙にして約240枚、約288,000字である。

活動中の「観察記録」は、最初に教員が様式の概略を指示しそのあとリーダーが記録の取り方について学生に指導した。第2回までは記録のノートに「事実関係と今の気持ち」を書くように指導し、第3回目のグループからは「今の気持ち、自分自身について」に重点を置くように指導した[21]。学生たちは記録を書くことに非常に熱心であった。リーダーから学生に疲れるのであまり無理しないようにと伝えたが、それでも学生は「書くことで気持ちが整理される」と毎晩ボランティア活動後遅くまで宿泊先で記録をととり組んだ。

4）倫理的配慮

本研究は学生の個人的データを取り扱うため、参加した学生に対しては、研究のために提出資料を使用することについて活動参加前に説明し、口頭で学生の了解を得た。加えて論文執筆に当たっては、再度研究の目的、匿名性について個別に文書と口頭で説明し、研究に協力するか否かは自由であること、協力を取りやめても何ら本人に不利益がないことを明示した。なお記録の分析などのデータの取り扱いにあたっては、学生の氏名が特定されることがないように匿名とした上、個人が特定されそうな内容については論文の叙述から除外した。

5）ボランティア活動の評価と分析の方法

1990年代以降、社会調査方法が多様化する中、欧米圏の質的研究に関する社会学関係の著作が多く翻訳された。その結果、昨今の日本社会において、量的研究方法で把握しきれない事柄への追究を目的として質的研究方法が注目を浴びている[22]。そのため、ボランティア活動等を含めた個々の人間が関与する活動現場（教育・看護等）の評価方法としても関心を集めている[23]。

多様な質的研究においては、必ずしも統一的見解が確立しているわけではない。しかし、以下の点を暫定的に規定する事が今後の研究を進める上で重要であろう[24]。

1．具体的な事例を重要視する
2．事例を時間的、地域的な特殊性の中でとらえる
3．事例自体の表現や行為に立脚する
4．人々が生きている地域的なコンテクストと結びつけて理解する

質的研究方法には、「恣意的」、「作為的」、「主観的」等の批判が寄せられてきた。主観と客観の融合とも言われる質的研究においては、分析結果の信憑性を担保する方法論へのさらなる検討が必要である。特に、スピリチュアル・ケアについての分析を実践する上では、以下の3点の理由から上記のデータ分析にナラティブ・アプローチを併用する事が効果的であると思われる[25]。

1．物語行為により物事の意味を理解できる。
2．調査対象者の現実や経験を知る際に、インフォーマントのナラティブにより理解できる。
3．個人の物語の分析は、広範な文脈の理解を深める。

以上を踏まえた上で、この研究においては以下のようなデータ分析の方法を用いた。1）まず全記録（約288,000字）を精読し、学生が「学びへの期待」と「学びの実感」などについて記述している箇所を抜き出してトピックごとにコード化し、2）その中で内容的に共通する部

分、頻繁に出てくる言葉や類似した文節をサブコードをつけて整理した。3）その上での継続的比較分析法を用いてそれぞれのコードを相互に比較検討しながら、そこから浮き上がってくるテーマやパターンを見出し、その特徴を明らかにした。4）最後にあらためて全体の文脈の中でそれが支持されるかを検討した。

6）主要なテーマとエピソード

分析の結果、学生の体験と学びを表す7つのデータと、それぞれの具体的内容を示すトピックなどは、以下のようなものであった。

a. アイデンティティ危機・・・「入り込めない場所」「緊張」
b. 不安と恐れ・・・「不安」「とまどい」「無力感」「疲れともやもやした気持ち」「泣きたい」「観察と自分への問いかけ」
c. 自己発見・・・「新たな自分の気持ちに触れる」「思い込んでいた自分に気づく」「観察と自分への問いかけ」
d. 自己表現・・・「言葉で表現する」「表現できない自分」「音楽で表現する」
e. つながり・関わり・・・「みまもる・つながる・あわせる・よりそう・being with」「みなで悩んだ」「関わりの深まり」「仲間との信頼関係」「バランス感覚」
f. ボランティアの意識・・・「反省」「カンファレンスでの体験」「外からの風」「終わりたい」「見守る」「楽しむ」
g. 学んだこと・得たこと・・・「つながり」「成長」「わかりあえる」

以下に、以上のテーマについて、エピソードをあげて説明したい。

a. アイデンティティ危機

・・・病院での活動開始時の強い緊張と危機の体験。

「入り込めない場所」

そびえ立つ10階建ての大学病院の建物を初めて目の前にしてひどく緊張したという学生も多い。白衣を着た医師や看護師、車いすの患者さんたちが大勢通り過ぎる病院の廊下を、「同志社女子大学」と書いたエプロンをつけて一列になって歩きながら、ここは自分たちなどは「入り込めない」「怖い場所」であると書いた者もあった。病院での活動は、まさに彼らにとって「未知との遭遇」の体験であり、その最初のショックを「必死で自分を保とうとしている」「意識して歩いていないと自分が今どこにいるのか分からなくなってしまいそうだった」と表現している。

「緊張」

初めはプレイルームで子どもに声をかけるのも緊張する。「この病院では人々が緊張している。」「1時間何もできず、ただ座っているだけで、子どもたちにとっても誰？という存在。とにかく緊張して、以前来たときと何も変わっていない自分がみじめになった。」（2回目の参加者）「1度目プレイルーム入ったとき、恥ずかしさで何もできず、2度目行く時不安で仕方なかった。」中には2回目の参加である先輩の姿を見て、「Aさんは、入ってすぐ手洗い場と反対方向のピアノのそばにいた小さな女の子を抱きかかえたお母さんに話しかけに行っていた。その姿を見てすごいなと思うしかなかった。」と書いた学生もあった。

b. 不安と恐れ

・・・新しい世界の中で不安や恐れや動揺を感じるという体験。

「不安」

プレイルームという新しい世界に入った学生たちは、一様に「不安」と「恐れ」、「無力感」について記述する。「髪の毛が少ない患児をみて動揺した。」「患児とどう話していいかわからなかった。」「勇気が出なかった。」「（子どもから）無視されたりして、自分を保ち続けることができるのかが率直に不安である。」「子どもたちが点滴を付けていたのは私にとって驚きで、動き回る患児にどう対応していいのか分からず不安だった。」

「とまどい」

ボランティアに参加した学生たちの中で、小さな子どもと遊んだ経験のある学生は少ない。「プレイルームにいる子どもたちが本格的に泣き出してしまったということを初めて経験したのでどうしていいか全くわからなかった。」学生たちは子どもよりはずっと大人であるが、闘病生活については子どもたちの方がベテランであり、教師である。彼らにとって闘病生活は日常なのである。「子どもたちは自分の病気のことを知っており、客観的に話した。」「B くん（9歳）が、『今日、肝臓の手術するんだ』と言って、また遊びだした。驚いてしまったが、かけてあげる言葉が思い浮かばない。B くんの前で私が驚いた顔もできないし、私が怖がったりもできない。」

「無力感」

そんな中で無力感を感じプレイルームに行く足が次第に鈍るのを、誰もが一度は経験する。「プレイルームに向かう足が非常に重かった。またあの緊張や恥ずかしさでどうすることもできない自分を想像すると、プレイルームに向かうのが怖くなった。」

「疲れともやもやした気持ち」

病棟でのこのような不安な体験は、自分の過去のつらい体験を呼び起こすのだろうか。「子どものころ母が入院してさびしかったことを思い出し、気持の『浮き沈み』があった。」「やっぱり心につっかえるものを、何人か持っているみたいだなと感じる。この複雑さをまた事後研修などで話し合えたらいいなと思う。3 日間終えて、ホッとしたというのも大きいし、疲れたというのもあるし、楽しかったという気持ちもある。でももやもやしたものが何なのかがすごく気になる、変な気分だった。」

「泣きたい」

学生が参加した病棟の合同カンファレンスでは、重篤な子どもや亡くなった子どもについて、スタッフ間で真剣な議論が交わされるのを聞いた。担当看護師や院内学級の教員たちが、子どもの病状や生活について、涙を流しながらしかも淡々と説明し熱心に議論するのを目の当たりにした。「私自身も泣きそうになるのを何度となく、ぐっとこらえていた。その子のことは知らないはずが、看護師の方の話を聞いていると本当にその子の姿がぱっと浮かんでくるようだった。けれど、何も知らない私が泣くなんてバカなんじゃないか、私が泣いてもいいものか、失礼にあたるんじゃないかとずっと涙をこらえていた。本当はずっと泣きたかった。」

c. 自己発見

・・・自分を見つめ新しい自分に出会って行く体験とそこからの学び。

「新たな自分の気持ちに触れる」

「私は D 君（6 歳）のことで完全に心が折れていた。午前の感想の中で E さんが、『F 君（9 歳）と喋っている時、先輩（注本人）がそういう風に（言葉を）返していて、自分では思いつかなかったためすごいと思った。』と言ってくれた時は涙がでそうだった。自分では全く意識していなかった会話をそのようにほめてもらえてこんな風に思ってくれているなんて・・・。自己嫌悪に陥っている私はやさしい言葉をかけられて涙が出そうだった。」

「思い込んでいた自分に気づく」

もしかしたら「私たちは何か大きなことを成し遂げなければならないと思いすぎていたのかもしれない。」「最初の不安は今思えばちっぽけだった。」「新しい考え方に触れ自分を理解しようとすることで、新しい自分に出会えた気がした。」

「観察と自分への問いかけ」

一方で冷静に周りの状況を観察している学生もいる。「今、私にとっては一時的に心が休まる状態というものが少ない状態であるので、気疲れがある。つまり病院の子どもたちは常にその状態であるということが容易に想像できる。」自分にはここでいったい何ができるのだろうか、自分には何か提供できるものがあるのだろうかと自問した学生もいる。プレイルームにはさまざまな「遊び」を提供できる「セミプロ」たち

もボランティアとしてやってくる。「私たちはマジックやバルーンなどといったものや技術がない分、子どもたちの興味をひくものが私自身でしかなく、(このボランティアは) すごくハードルが高いものだと改めて思った。」

d. 自己表現

・・・表現の大切さと難しさについての体験と学び。

「言葉で表現する」

毎朝活動を始める前と夕方終わった後には、全員でその日の出来事を確認しそれについて話し合った。「今日の朝のミーティングでは体調確認をし、仲間がいることの大切さ、語り合うことでのストレス発散効果などいろいろ知れた。」「自分の意見や思いを正直に話すことの大切さを感じた。自分の思いを吐き出すことによって自分がリフレッシュすると共に、辛い中では仲間との関係を築くためにも自分の思いを話すことが大切なのだと感じた。」「自分や皆で考え、意見を交換しあい、それを自分のものにすることが多いような気がした。」「レポートを書くという作業などをすることで、今日ここがだめだったから明日はこうしようと前向きに考え行動することが出来たように思う。」

「表現できない自分」

もっとも「感情表出ができない、するのが怖い」という自分に気づいたという学生もおり、次のような批判と反省もみられる。「子どもたちとご両親に、何をしてあげたいのかを明確にし、それをみんなで話し合うことが大切だと思う。メンバー全員（リーダーも）が、思いをぶつけ合って考え悩むべきであり、そうすることによって、それが団結力に繋がって相手に与えるだけでなくて、私たち自身ももっとたくさんのことを学んで帰って来られたのではないかと思う。」

「音楽で表現する」

この活動の中のハイライトのひとつが終盤に行われる「音楽会」であった。行く前から皆で何度も練習し、鈴やハンドベルを準備して、ピアノ演奏と歌と踊りで子どもたちやご家族といっしょに楽しむ時間である。初日には不安でプレイルームに入るのも躊躇していた学生たちであるが、練習を重ね子どもたちとなじむうちに「はやくみんなでマルモのダンスを踊りたい。」と変わってくる。「今回は練習をきちんと積んでいたことから、歌いたい！見せたい！踊りたい！と言う気持ちで挑むことができた。自分でやっていてとにかく楽しいと思える音楽会だった。前回あったような、極度の緊張や恥ずかしさはなくなっていた。」

e. つながり・関わり

・・・人と人とのつながりや関わりについての体験と学び。

「みまもる・つながる・あわせる・よりそう・being with」

活動の初日に全員参加で行われる人間関係トレーニング「つながるワークショップ」では、どのようにして人と心で「つながる」かということを体験的に学ぶ。そこで学んだキーワード「みまもる」「つながる」「呼吸をあわせる」「よりそう」「being with（共にある)」などは、その後頻繁に学生たちの記録の中で使われたことからみて、子どもたちへの関わりにも影響を与えたのではないかと思われる。「呼吸を合わせる、体を合わせる。同じ目線、同じ立場になるために。手を出すことはせず、こうしたら上手くいくよということを口でアドバイスした。」「テンションを合わせ、being with だけを意識する。共に見守る。やりたいようにさせてあげるようにだけ気をつけた。」

「みなで悩んだ」

ボランティアとしていったい自分たちには何ができるのかということを何度も何度も皆で話し合った。また、いったいどうしたら子どもたちと上手く遊べるのだろうと「皆で悩んだ。」そして悩みながら再び仲間と話し合った。「彼女と話したことで自分自身も人に対しての思いやりや感謝の気持ちについて、きちんと自覚し、考えなければならないということを気付かされ

た。」

「関わりの深まり」

学生たちの記録には、彼らが次第に子どもたちの中に入っていき、子どもたちとの関わりが深まってゆく様子が生き生きと描かれている。「『おはよう』や『こんにちは』の前にできるだけ名前を言うようにした。私自身名前を呼んでもらうとなんだか少し嬉しい気持ちになるので、もしかしたら子どもたちも少し嬉しい気持ちになってくれるかな、そうだといいなと思ったからだ。」「ちょうど10回終えた辺りでF君（9歳）が帰ってきた。私たちは自然に『おかえりー』と言えるようになっていた。自分でも驚きだった。」「A君が急に『抱っこして』と言ってきた。なぜだろう？雰囲気で太鼓では遊べないということを察してくれたのかな？それとも、昨日遊んだことが相当楽しかったのかな？とにかく、私はとてもうれしかった。なので、とりあえず抱っこして楽しませてあげようと思ってぐるぐる回ってみた。すると、A君はとても喜んでくれたのでよかった。」「キャッチボールをしているB君はとても楽しそうだった。今まで、話しかけてもあまり笑ってくれなかったのに、笑ってくれた。また、B君から話しかけてきてくれた。」「子どもに遊びを『教えてもらう』ということを実行する。そうすると、塗り絵をしている時より話が弾み、C子ちゃんはとても楽しそうに教えてくれた。」

「仲間との信頼関係」

最初は不安で自信がなかった学生たちがここまでやってこれたのは、彼らを支えてくれる仲間がいたからだ。夕方活動が終わるとみんなでホテルに帰り、とりとめのないおしゃべりをした。「学生たちで夜、意味のない笑い話をし、みんなで居酒屋やもつ鍋屋さんに行ってご飯を食べたのも絶対に必要なことだったと思う。」「みんながそれぞれ『何かしよう』と思って動いている姿勢はすごく感じることができているので、私も頑張ろうと思えるし、みんなで良い時間を作っていけるような心強さはすごく感じている。」

「バランス感覚」

しかし、人間はいったいどこまで本当にお互い正直になれるのだろう。どのように人間関係の距離をとったらよいのだろう。「いいなと思ったことは気づいた際に言葉や表情に出すようにしたが、悪いことは正直どこまで言ったらいいのかわからなかった。」「自分の役割や立ち位置を把握する、あるいは作っていくことで『自分の居場所』というものを実感し、自分を保つこともできます。自分を持っているけれども、大勢の人間の中で馴染まなければいけないことは難しいし、一見正反対のことを要求しているようです。しかし、そのバランスを保っていくことが人間社会を生きていく上で大切だと思います。」

f. ボランティアの意識

・・・ボランティアとしての自分たちの存在意義についての考察と学び。

「反省」

ボランティアとしていったい自分たちには何ができるのだろうか。そもそも少しでも役に立ったのだろうか。

まず学生たちの心に浮かんだのは、活動から自分たちが得たものの大きさと、活動が終わっても自分たちのように外の世界に戻ることのできない子どもたちのことであった。「自分中心のこと（何かを学ぶことや得ること）ばかり考えていて、病院に居る患者さんたちに何をしてあげられるか、どんなことをしてあげたいかについて考えていなかった。」「色々気配りして大変だったけれど、子ども達と楽しく遊んで1週間を終えたように感じられ、本当に私がボランティアに行って病院・子どもたち・ご両親側に意味があったのか、良い影響を与えられたのか、私だけがいい思いをしているのではないかと感じている。」

「カンファレンスでの体験」

特に、前述のカンファレンスに参加して初めて子どもの死に向き合った体験は、学生一人一人の心に鋭い課題を突き付けたようである。「残

念ながら亡くなってしまった患児の話に移ると、みんなが泣き出した。いつも笑っているやさしい笑顔のA先生（保育士）の涙、いつもきびきび働いている看護師さんの涙は忘れられない。本当に深く関わっていること、ここの職員もみんな同じ人間であることを思い知らされたような感じだった。そんな当たり前のことを今まで知らずにいたのかと恥ずかしく思った。とにかく内容の濃い一時間だった。」「少なくとも参加中は『死と向き合っている』と思った。あそこにいた誰もが真剣に誰かのことを考え、事実に向き合おうとしていたと思った。あの時間はもしかしたら、看護師をはじめとした患児に関わって働く職員の泣く場（感情を出せる場）でもあるかもしれない。非常に大切な時間だと思ったし、仕事場にそのような空間があってよかったと思った。ホッとした。急にこころの距離が近くなったと勝手ながら感じていた。」

「終わりたい」

別の学生はカンファレンスの後、事柄の重さに耐えられないと正直な気持ちを漏らす。「私たちの活動は明日で終わるのに、みなさんの仕事はこれから一生続いていってその限りはこの悲しみから逃れることはできないのか・・・とどこまでも勝手に思いを巡らせてしまった。すると、私たちの活動も明日で終わりでないような変な感覚に襲われた。そうなると『終わりたい、終わりたい』と思っている自分がいた。正直私たちは、プレイルームの中のことしか知らないんだなと思ったし、他にもいろんな思いが頭を巡った。いろんなことを考えすぎて親睦会を楽しめなかった。」

「外からの風」

では、自分たちボランティアとはいったいどんな存在なのだろう。2回目の活動の時、学生たちに自分たちにグループ名をつけるように言ったところ、みなで話し合って『ぶどうの風』と名付けることになった。「ぶどう」はいうまでもなく本学のシンボルのひとつである。では、「風」とは何か。ボランティアは医療スタッフではない。しかし、「痛いことをしない」という点で、やさしく吹き抜ける「外からの風」、「風のようにやってきて風のように去ってゆく存在」だと学生たちは話し合ったのである。『ぶどうの風』は外の世界の空気を運んでくる大切な存在だ。しかしあくまでも「ゲスト」であり、「その立場を忘れてはいけない」とも彼らは考えた。なぜならば、あくまでも「治療」という病棟の日常があった上でのゲストだから。そして、決して「病棟の日常を壊してはいけない」と自戒した。「患児の空間を大切にしてあげたかった。」と書いた学生もいる。

「見守る」

ボランティアとして医療スタッフのようなことはなにもできないが、子どもたちをあたたかく「見守る」ことはできると考えた学生もいた。「親は子どもにとって絶大な存在であるので、私達が割って入るところではないからこそ、（わたしたちの）見守るという役割（が大切であり）、またずっと付きっきりでいないといけない親にとって、その5分（注　子どもを置いてちょっと買い物などに行くこと）が生み出せない中、私達に（子どもをみることを）任せてもらうことで、私達の『一緒に遊ぶ（見守る）』という役割を果たせるのではないか。」「ボランティアをするにあたって、『何もできない』ことを前提にすると、『～してあげる』という（上からの）意識が弱くなります。それはいい意味であって、人間関係を築くという点ですごく大切な要素であると思います。」

「楽しむ」

またボランティアだからといって気負うのではなく、自分が楽しむことも大切ではないかと考えた学生たちもあった。「前来た時には役に立ったんかとか、何のために来たんやろうって悩んでいて、もちろんそれも大切だが、今回は自分が楽しんですることができたことがよかった。」「子どもたちとも去年は『お姉さん』として関わろうとして、難しさを感じていたけれど、今回は自然体で普通に『おともだち』として関わっていて、それが自分にもあっていて、楽しく過ごせているのかなと思う。」

g. 学んだこと・得たこと

・・・最後に、学生たちはこの活動から自分は何を学んだと思っているのだろうか。

「つながり」

「私は、今回の活動を通じて、人と人とのつながりの大切さについて学びました。また、心のケアの必要性や重要性についても学びました。そして、この2つのことが、密接に関係していているということを学びました。なぜなら、人と人とのつながりがなければ、心のケアはできません。また、心のケアを必要としている人々は、人とのつながりを求めているのではないか、ということを感じました。そして、子どもたちやそのご家族たちが、同じ境遇に遭遇している人々同士で会話をすることによって、互いに安心や勇気を分け合って生きているということを知りました。」

「成長」

「三日なんて短いと思ったけれど、始めてみたら一時間一時間が新鮮でドキドキで、不安で、自信を持ったり無くしたりして、意味ある今の積み重ねが成長へとつながっていくんだなと感じていた。」

「わかりあえた」

「絵本作りを通じて分かったことは、何か作業を共にすることで、ぐっと距離が縮まり楽しい気持ちになるということ。また何かを作ることによって気持ちを物にたくす、表現することができることを学んだ。」

第5章　評価・分析コーパスから見える現状と展望

1）目的

本章では、5回のボランティア活動の学生の記録集[26]から抽出されたキーワードとキーコンセプトを中心に、その言語表現に表出された参加者の意識を分析した。そこからボランティアワーク[27]が参加者に及ぼした影響を考察することと、ボランティア活動においてどのような人間理解が育まれたのかを検証し、ボランティアワークの現状と今後の課題を探ることを目的とする。

2）方法

分析にあたっては、データマイニングの方法によって各回の「評価・分析シート」において頻出度の高い単語を中心にして、コロケーションなどにも配慮しながら分析した。この分析に期待できることは、かならずしも参加者各様の意識を浮き彫りにすることではない。いずれのシートもメンターによって多少とはいえ、意味が解釈され、その言語表現についても修正が加えられている部分を含んでいる。したがって、ここでは、これらのシートを参加者とメンターの意識も合わせて反映した一体的なコーパスとして位置づけて諸要素の抽出を試みた[28]。そこからボランティアワークにかかわる意識の全体像を描いてみたい。

固有名詞などは参加者同士の関係のダイナミズムを探るためには重要であるが、分析の目的が異なるので今回は基本的に分析対象とはしていない。同様の理由で、いくつかの形態素についても対象から除外せざるを得ないが、名詞、サ変動詞、動詞、形容詞などは、参加者の意識を探る上で多くの有用情報を提供していると考えられる。

ただし、いま述べたように、分析データそのものが参加者による一次的なコーパスではないことを考慮して、本章においては使用言語の傾向を計量的に観察しながら、その計量的データそのものの提示は最小限にとどめた。むしろ、毎回のボランティアワークを指導し、またメンターの役割を担った才藤と藤原らの理論と意識も反映した言語（意識）の集合体として、その全体像を浮き彫りにする方法を選択したのである。

3）評価・分析コーパス

以下、各回の評価・分析コーパスから読み解くことができる特徴を簡略に紹介したい。ただし、分析対象とした以下4回のボランティアワーク参加者はかならずしも継続して参加した

わけではない。たとえば、第5回を初回とした参加者もあったのであり、ここから単純に参加者の意識の変化を読み取ることはできない。ただし、傾向としては、回を重ねるにしたがって一定の展開を読み取ることができる。病院、病棟、患児、家族、医療スタッフなどへの理解のみならず、自己理解とボランティア同士への理解が深まり、新しい展望が見え隠れする。それには、一部の継続参加者と指導者およびメンターの影響が強く反映しているものとおもわれる。なお第4回に関しては、前述のように3月11日に起こった東北大震災の影響により規模を縮小し、学生参加者は1名、卒業生2名のみとなったため、分析のための記録がない。

a）第1回　2009年3月9日～12日　4日間

参加者：5名（大学院生1名、社会システム学科2回生3名、情報メディア学科3回生1名）

一般名詞としては「子ども」(67)[29]、「先生」(20)、「病院」(20) など。サ変動詞では「話」(14)、「実習」(12)、「会話」(7) などにまじって、「参加」(5)、「意識」(5)、「観察」(5)、「緊張」(5)、「経験」(4) などが確認され、このボランティアワークそのものの方向が了解されずに、共通認識になっていない段階での参加者の緊張が表出している。さらに、この傾向は形容動詞に顕著であり、「不安」(12) がトップ、つぎに「元気」(5)、「普通」(4) がつづく。その募る不安を和らげたのが動詞「遊ぶ」(22)、「感じる」(15)、「思う」(15) であったようだ。プレイルームでの患児たちとの遊技を通して、自身の内面、あるいは意識を探ろうとする傾向を読み取ることができる。また、これらの動詞につづいて、「見る」(7)、「聞く」(7)、「座る」(7) などの頻出も興味深い。これらの動作は、「遊ぶ」が含意する動的な働きよりも、静的イメージを喚起するからである。

また普通名詞のなかに見られる「きっかけ」(8) の使用は、初めて出会った患児たちとの関係をどのように構築するのか悩む参加者の心象を浮き彫りにしている。ちなみに、副詞「初めて」(2) の出現は、初回という状況から考えると以外に少ないものであった。

b）第2回　2010年3月7日～13日　7日間

参加者：6名（大学院生1名、社会システム学科4回生1名、2回生4名）

頻出数上位の一般名詞としては、「自分」(204)、「子ども」(176)、「音楽」(158)、「お母さん」(156)、「絵本」(119)、「先生」(98)、「お父さん」(78)、「ボランティア」(75)、「病院」(70) などがつづく[30]。ボランティアとしてのかかわりが、患児の家族にも及んでいること、また、患児たちと参加者とをつなぐものとしての音楽の役割にも関心がむけられている[31]。そして、群を抜いて出現する「自分」は関連する諸要因相互の関係を総合的に理解し、分析する意識が成立する場としての「自分」のあり方を問いかけているのだと思われる[32]。

いっぽう、サ変動詞では第1回で出現順位9位であった「緊張」(5) は、35位 (12) と大きく後退している。この回が初回の経験を踏まえて計画され、指導者とメンター、および病院の受け入れにおいても、最初から活動の全体を視野に入れやすく感じられていたこと、さらには、現地での研修なども開催された結果[33]であろう。サ変動詞の上位には、通常の病院ボランティアの報告書にも多出するとおもわれる語が順に並んだ[34]。形容動詞については、「大切」(54) がトップで、「不安」(32) は2位ではあるが、出現回数においては「大切」の60％程度にすぎない。ここにも2回目の特徴を読み取ることができるだろう[35]。さらには、ナイ形容詞については、「問題」(14) が圧倒的で「仕方」(7) の倍を数えた。これもいくつかの懸案や心配を「問題ない」と対処したようすを察することができるだろう。参加者のこうした能動的な姿勢は動詞の使用状況においても確認することができる[36]。

c）第3回　2010年9月12日～18日　7日間

参加者：8名（社会システム学科3回生4名、情報メディア学科2回生1名、卒業生2名）

一般名詞では、「子ども」(274)、「自分」(179)、

「お母さん」(174) が圧倒的出現数である。ただし、今回は「自分」と「子ども」の順位は大差によって逆転していること、そして、前回上位であった「お父さん」(12) は60位に下降したことが注目される。代わって上位には「絵本」(143) が確認される。これは同時期に小児科病棟で開催された「絵本カーニバル」の影響だと思われる。いずれにしても、ボランティアワーク全体の関心が、患児にむかい、患児たちを対象とした催しへとむけられていることが立証される。サ変動詞の1位は「病気」(50) であるが、これも参加者の関心が目の前の患児たちの現状をまず受容しようとする態度の現れであったと解釈することができるだろうか。この推測を裏付けるように、動詞「思う」(282)、「感じる」(130)、「遊ぶ」(111) につづいて、「考える」(105)、「見る」(105)、「聞く」(85) が上位を占めている。参加者自身が自己の知覚認識を活用し、現状が語る意味の深層を読み解こうとする傾向を示しているのである。

形容詞には、「楽しい」(62)、「良い」(40)、「多い」(34)、「嬉しい」(26) などの肯定語が目立った。これも絵本カーニバルの影響があったと推測すべきかもしれない。むしろ、絵本カーニバルの催しも含めて、小児病棟という現場におけるこれらの語彙がもつ意味としては、背後にある種の緊張があったと推察することもできるだろう。

d) 第5回　2011年8月23日～27日　5日間

参加者：8名　(社会システム学科4回生4名、3回生・2回生・1回生各1名、卒業生1名)

コーパスの傾向はこれまでのものと大きな差は認められない。この傾向はこれまで着目してきたサ変動詞、形容動詞、動詞などにおいてほぼ確認することができる。たとえば、今回もサ変動詞において、初期には上位に観察された「緊張」(23) は21位にまで後退している。すでに述べたように、この回にも初参加者がいるので、本人には初回の緊張はあったと思われる。けれども、回を重ねたことでボランティアワークにおいて「緊張」は支配的ではなくなったことがわかる。ただし、形容動詞においては「不安」(95) は2位の「元気」(48) に2倍近い差をつけて1位となっている。経験と改善を重ねたプログラムにおいて、「緊張」を必要としないボランティアワークにと変貌したのかもしれない。参加者の意識には、これから起こるであろう不測の事態を、恐れの表出でもある「不安」として理解されており、それは消え去ることのない意識であるのかもしれない。

第6章　人間理解－聖書を手がかりに

評価･分析コーパスからは、ボランティアワークにおいてどのような意識が全体を規定しきたのかある程度の実像に迫ることができた。才藤と藤原らは、毎回の具体的なプログラムを設計し、現場において参加者を指導した経験から、5回のボランティアワークにおける参加者の意識を「不安と恐れ」という意識によって集約的に理解しようとした。才藤と藤原らは、同時に、参加者の「アイデンティティクライシス」、「つながり・かかわり」、「自己発見」、「自己表現」などの意識的傾向も指摘している。これらは、いずれもコーパスにおける検証結果に沿うものと思われる。初回参加者の戸惑いや緊張、そして不安は、文字通り大学病院小児病棟でのアイデンティティクライシスであった。参加者およびボランティアワークの全体は、どのようにしてこのような「存在の危機」を克服し、自己と他者が立脚する新しい地平を展望することができたのだろうか。あるいはその可能性を有しているのだろうか。

とくに、プログラムの継続と改善によって「緊張」はかなり解消されたと判断できるが、不安は解消されない意識であったことが今回の分析で明らかになった。このような分析結果にどれほどの普遍性があるかは、今後も検証と実践および研究とを重ねなければならない。しかし、本章においては、今回の連続したボランティアワークによって形成された人間理解（参加者、指導者とメンター、患児、家族、医療スタッフ、その他の関係者を含む）が、いったいどのよう

なものであり、それはどのような可能性をもった人間理解にと展開する可能性をもつものなのか、新約聖書のエピソードを参観しながら考察してみたい[37]。

新約聖書には、イエスの弟子となったペトロとヨハネとがエルサレム神殿に足を踏み入れようとしたときに、「生まれながらに足の不自由な男が運ばれてきた」ようすが報告されている（使徒言行録 3:1-2）。そこは「美しい門」と呼ばれる神殿境内への入り口であった。彼は施しを乞うために、毎日そこに「置いてもらっていた」のであった。ここからは、生きたまま「物」のように放置され、公共圏の外へと追いやられたひとりの人間の現実と、人を生きたまま物にと変質させてしまう人間社会に胚胎する恐怖を読み取ることができる。

このエピソードはどのような事態にと展開するだろうか。ペトロとヨハネとがイエスの弟子であったことを知れば、彼らには慈善行為こそが期待されるべきるかもしれない。そもそもこの男は、人々の施しを受けることを目的にして、ここに置かれていたのだった。しかし、ふたりの弟子たちの応答は意外にも、「一緒に彼をじっと見て、『わたしたちを見なさい』」（3:4）と語りかけたに過ぎなかった。「わたしたちを見なさい」を「わたしたちを模範とせよ」と解釈すれば、その傲慢が批判されるかもしれない。しかし、この発話行為には、「わたしには金や銀はない」（3:6）という発語がつづくのである。以下、このエピソードの展開については紙幅の関係で省略せざるを得ないが、ふたりの弟子たちは「無所有者」に過ぎな１人称複数形の「わたしたち」を見るようにと訴えたのだった。

3:4 を直訳的に試訳すれば、「そしてペトロは、かれの視線を男に釘付けにした。ヨハネとともに。そして言った『わたしたちを見なさい』」となる。ここでは、ふたりの弟子たちの共同性が「見る」という視覚認識の前提となっている。しかも、ここには「見る」と訳される語の連鎖する事態が観察される。つまり、イ）男を「じっと見る」弟子たち、ロ）わたしたちを「見なさい」、ハ）男は何かをもらえるとおもってふたりを「見つめる」、という「見る」の連続である[38]。

イ）→ロ）→ハ）という視覚認識のシークエンスののちに、弟子たちの「無所有」性が明らかにされている。ふたりの弟子たちもまた、2000 年前のエルサレムにおいて、（イエスの）新しい教えに従う者として、いわば公共圏の外に踏み出しつつあった（あるいは追われつつあった）ことが歴史の事実であったとすれば、無所有であるふたりと施しを期待する男とに共通する「見る」という行為は、公共圏の外に新たな親密圏を形成しようとする営みにも近いということにはならないだろうか。キリスト教倫理が、いわゆる利害得失や経済効果の価値社会とは非対称である共生社会を提案することができるとすれば、その源流のひとつがこのエピソードなのである。

聖書が描く人間理解は示唆的である。なぜなら、ボランティアワークの参加者たちが、緊張と不安のなかで、「なにもできない」と感じた危機こそを、新しい共生と親密圏創出の原動力にと転換しているからである。すくなくとも、このエピソードはその価値の判断基準、あるいは座標軸の転換を読む者に迫る。

いま親密圏の語を使用したが、それは単純に人間生活の私的領域を指しているのではない。親密圏と公共圏の二者択一ではなく、むしろ両者を融合させた、いわば親密圏を内包した新しい共同性が必要なのかもしれない。2011.3.11 の東日本大震災以来、巷間にあふれた「絆」は新しい共生社会を必要とする時代を代弁しているのだろう。その意味で、ボランティアワークの評価・分析シートと聖書的人間理解の間に、十分に問題深化の余地が残されていることを指摘しておきたい[39]。

第７章　おわりに－全人的人間理解に向けた学びの可能性

昨年の東北大震災以来、「絆」や「つながり」の大切さがあちらこちらで強調されてきたように、本ボランティア活動に参加した学生たち

の多くも、「人のために何か役に立ちたい」「絆を深めたい」という素朴な思いを持って活動に関わった。しかし彼らが書いた活動記録からは、医療現場で、命の危機と向き合っている子どもたちとそのご家族に出会い、彼らに共感しながら同時に自らの無力さと向き合い患児とそのご家族を支援するという困難な作業を通して、人と人との絆のあり方と意味を新たに見つめ直そうとしたことが示唆された。

この研究の今後の課題は、命の危機の中にある子どもたちと出会って自らも価値観・人生観が揺がされる体験をする学生たちが、よりいっそう支援についての学びを深められるように援助するボランティア教育プログラムを開発することである。その際には、1）学生の記録を広範な文脈の理解のもと、より詳細に検討することと、2）記録の分析の結果と本稿で示唆された聖書的人間理解との更なる対話を続けることが必要になると考えるものである。

注

1）桜井政成・津止正敏編著『ボランティア教育の新地平―サービスラーニングの原理と実践』（ミネルヴァ書房、2009 年）, 9-14.

2）主に以下の研究成果を参考に筆者による時代区分。区分の適合性に関しては今後の議論に譲る。徳久球雄編『人の生き方としてのボランティア』（嵯峨野書院、1997 年）、桜井・津止編著『ボランティア教育の地平 - サービスラーニングの原理と実践 - 』、杉岡秀紀・久保友美「関西を中心とした大学ボランティアセンターの現状・課題・展望 - サービス・ラーニングという新潮流を踏まえて - 」『社会科学　第 79 号』（2007 年）、129 － 158 ページ。

3）徳永、前掲書、33 ページ。

4）同上、35 ページ。

5）同上、36 ページ。

6）同上、35 － 36 ページ。杉岡・久保、前掲書、129 ページ。

7）2000 年 3 月、内閣総理大臣のもとに発足した教育改革国民会議は 9 月に中間報告を発表した。4 つの柱を軸に 17 の具体的な提案が示された。その一つに「奉仕活動の義務化」が挙げられた。「奉仕活動の義務化」の流れは、1996 年の橋本内閣の時代より継続している発想でもあった。しかし、日本ボランティア学会が指摘するように「『義務として行うボランタリーな活動』という概念は、それ自体が語義矛盾」がある等の異論が続出したため、最終報告では記載されなかった。

8）桜井・津止、前掲書、1-17 ページ。両名は以下の研究成果に学び、ボランティア活動の教育効果を的確に提示している。馬場由美子・島かおり・大宅顕一郎「学生のボランティア活動と社会的スキルの変化に関する一考察」『永原学園西九州大学・佐賀短期大学紀要』36 巻（2006 年）、155 － 162 ページ。津止正敏・足立陽子編『大学生とボランティア - ボランティアケーススタディ 2』（立命館大学人間科学研究所、2004 年）。

9）徳久球雄「ボランティア」『人の生き方としてのボランティア』（嵯峨野書院、1997 年）、湯木洋一「ボランティア考」『現代キリスト教倫理 3 日本に生きる』（日本基督教団出版局、1999 年）、320-340 ページ。

10）湯木は以下のごとく主張する。

> 福音によって招かれ、与えられる新しい生への参加の自由は、限られた生の領域に関することではなく、自らの生きる全領域において、神と人とを愛することへの自由であり、－中略－主の愛される全ての人間の尊厳を傷つけることなく、悲しむ者、苦しむ者の重荷を、限界をもちながらも、共に担うことへの自由である。そのように仕えることへの自由である（同書、338 ページ）。

11）新約聖書マルコによる福音書 5:25-34

12）絹川久子『女性たちとイエス』（日本基督教団出版局、1997 年）、93 ページ。

13）同書、198-200 ページ。

14）病気が治癒した後、薬や放射線、手術などの治療によってもたらされた副反応や病気そのものの影響によって起こる様々な症状、障害のこと。

15）例えば、細谷亮太・真部淳『小児がん－チーム医療とトータル・ケア』中央公論新社、2008 年

16）例えば、小澤美和他「小児がん患児のきょうだいにおける心理的問題の検討」『日本小児科学会雑誌 111 巻 7 号』（2007）847-854 ページ、小澤美和「小児がん患者の両親のメンタルヘルス」『腫瘍内科 8（1）』（2011）, 68-75 ページ

17）これらの他に、主に社会システム学科の学生

を対象に合計6回にわたり公開講座やワークショップを開催したが、その参加者は延べ225名であった。

18）アメリカで発達した牧師のための臨床訓練であり主に病院で行われる。もともとはキリスト教の牧師養成のための訓練であったが、近年では宗派を超えたスピリチュアルケアワーカーの養成訓練の中で代表的なものとされる。

19）日本における代表的電話相談ボランティア活動。相談員は全員無給ボランティアであるが、相談員になるためには2年間にわたる訓練を受けなければならない。

20）監修：住江愛子・古賀友紀、編集：才藤千津子、同志社女子大学現代社会学部ライフ研究会『入院なんてこわくない－なっちゃんの入院』（梓書院、2012年3月、非売品）として制作され、2012年4月から病棟で配布・利用される。「プレパレーション」とは入院する患児のための心理的混乱を和らげるための準備や配慮のことであり、絵本を使って入院や検査について説明をすることなどがその例である

21）ファシリテーター（教員）とリーダー（経験者学生・卒業生）は、ボランティア活動の中で学生が「自分自身の心の動き」（「なぜ、その行動をとったのか」「どう感じたのか」「なにが不安だったのか」。）を意識し、言語化し、自己省察を深めるように指導した。

22）菊池裕生・大谷栄一「社会学におけるナラティブ・アプローチの可能性－構築される『私』と『私たち』の分析のために－」『年報社会科学基礎論研究』第2号（ハーベスト社、2003年）、167－183ページ。

23）岡村純「質的研究の看護学領域への展開－社会調査方法論の視点から－」『沖縄県立看護大学紀要』第5号（2004年）、3－15ページ。

24）同上。ウヴェ・フリック著、小田博志、春日常、山本則子、宮地尚子訳『質的研究入門－＜人間の科学＞のための方法論－』（春秋社、2002年）。

25）菊池・大谷、前掲書。

26）ここでは、学生が自らの活動について評価を加え、分析をしたという意味で「評価・分析シート」と呼ぶ。本稿では、「評価・分析シート」と「評価・分析コーパス」とを随時使い分けているが、基本的に、前者は紙媒体の資料を後者は機械可読資料体として分析対象されるものを指している。

27）本稿における「ボランティアワーク」は、基本的に本研究プロジェクトにおいて断続的に5回実施されてきた大学病院小児病棟でのボランティア活動を指している。ただし、文脈上明らかに普通名詞として一般的なボランティアワークについて使われる場合もあるが、その場合には文脈から判断されたい。

28）もちろん、ここにはメンターだけではなく、全体を指導した才藤の理論や意識が強く反映しており、ある部分だけを分離したコーパスを構築することは事実上不可能であると判断される。実際の分析にあたっては、計量テキスト分析またはテキストマイニングのためのフリーソフトウエア KH Coder（樋口耕一、Ver.2beta27,2011 11/26）を用いた。

29）（　　）内数字は、コーパスに出現する回数を示しているが、各回のコーパスのデータ量が一定ではないので、この数字は目安であり、言語使用状況の傾向を読み解くための指標とした。以下同様。

30）以下、「楽器」（69）、「遊び」（68）、「男の子」（60）、「パズル」（58）、「ピアノ」（55）、「気持ち」（51）、「興味」（48）、「学生」（46）など。

31）その理由としては、参加者同士の打ち合わせや相互評価が反映していると考えられる。

32）もちろん、かならずしも参加者自身を指しているわけではなく、「子どもが自分のことを～のように」というような使用例も含んでいる。

33）「つながるワークショップ」「絵本カーニバル」あるいは、医療スタッフによる「カンファレンス」の見学などは、参加者の言語使用と意識とに多大な影響を与えている。

34）「一緒」（54）、「活動」（56）、「演奏」（55）、「話」（48）、「参加」（46）、「反省」（41）、「意見」（38）など。

35）形容動詞では、さらに「必要」（29）、「好き」（25）、「重要」（22）、「夢中」（17）、「元気」（14）、「純粋」（13）がつづいており、価値判断を示す語の多様が目立った。

36）上位には「思う」（290）、「遊ぶ」（127）、「見る」（106）などが並んでいる。

37）この考察は、同時にキリスト教精神を建学理念とする本学において、今後どのような教育方法が開発されるべきなのかを考え、社会的にも期待が寄せられているボランティア活動をささえる人間そのもの根源的なあり様を探ることにも、新しい可能性を披くことになろうかとおもわれる。

38）『新共同訳聖書』は、「じっと見る」「見る」「見つめる」と訳し分け原文でも、それぞれ別の語が使われている。本稿では、原文の語義には立ち入らないが、邦訳聖書がそれぞれの語の意味をほぼ忠実に訳しわけていることだけを確認しておきたい。

39）今回の九州大学病院小児科病棟でのボランティアワークの一連の経験と蓄積は、今後、本学における新しいボランティア教育の可能性を示唆しているだろう。

参考文献

ウヴェ・フリック著、小田博志、春日常、山本則子、宮地尚子訳『質的研究入門－＜人間の科学＞のための方法論－』春秋社、2002 年

岡村純「質的研究の看護学領域への展開－社会調査方法論の視点から－」『沖縄県立看護大学紀要』第 5 号（2004 年）、3－15 ページ

小澤美和他「小児がん患児のきょうだいにおける心理的問題の検討」『日本小児科学会雑誌 111 巻 7 号』847-854、2007

小澤美和「小児がん患者の両親のメンタルヘルス」『腫瘍内科 8（1)』(2011), 68-75 ページ

菊池裕生・大谷栄一「社会学におけるナラティブ・アプローチの可能性－構築される『私』と『私たち』の分析のために－」『年報社会科学基礎論研究』第 2 号（ハーベスト社、2003 年）、167－183 ページ

萱間真美『質的研究実践ノート－研究プロセスを進める clue とポイント』医学書院、2007 年

絹川久子『女性たちとイエス』日本基督教団出版局、1997 年

桜井政成・津止正敏編著『ボランティア教育の新地平―サービスラーニングの原理と実践』（ミネルヴァ書房、2009 年

杉岡秀紀・久保友美「関西を中心とした大学ボランティアセンターの現状・課題・展望―サービス・ラーニングという新潮流を踏まえて－」『社会科学　第 79 号』(2007 年)、129－158 ページ

津止正敏・足立陽子編『大学生とボランティア－ボランティアケーススタディ 2』（立命館大学人間科学研究所、2004 年

徳久球雄編『人の生き方としてのボランティア』嵯峨野書院、1997 年

馬場由美子･島かおり･大宅顕一郎「学生のボランティア活動と社会的スキルの変化に関する一考察」『永原学園西九州大学・佐賀短期大学紀要』36 巻（2006 年）、155－162 ページ

フェロー・トゥモロー『病気の子どもの気持ち～小児がん経験者のアンケートから～』東京：がんの子供を守る会、2001 年

細谷亮太･真部淳『小児がん－チーム医療とトータル・ケア』中央公論新社、2008 年

日本聖書協会『新約聖書（新共同訳)』「マルコによる福音書」

湯木洋一「ボランティア考」『現代キリスト教倫理 3 日本に生きる』（日本基督教団出版局、1999 年)、320-340 ページ

（本研究活動は、2009 年度三菱財団社会福祉助成金によって実施されたものである。）